

## リレーエッセイ「ハマの判事補の1日」(第3回)

### 判事補の研鑽について

#### 1 はじめに

横浜地方裁判所第3民事部の勝又来未子です。平成19年9月に裁判官になりました。いま、5年目の判事補です。

私は、もともとは理系で、企業でシステムエンジニア等として働いたあと、司法試験を受けて裁判官になりました。少し変わり種なのですが、実は私の曾祖父が横浜弁護士会所属の弁護士だったそうで、関東大震災のときに、横浜地方裁判所で亡くなったそうなのです。このことは、横浜地方裁判所に着任してから知ったのですが、なんとも不思議な縁を感じます。横浜地裁の正面入口脇には関東大震災の慰霊碑が建っていますが、私の曾祖父の名前もあります。

#### 2 新人裁判官の研鑽

裁判官の仕事は、紛争や事件に法律を適用して判断するという仕事です。紛争や事件を理解しようとするためには、あらゆる人生経験が直接的にも間接的にも役に立ちます。

そのようなことから、弁護士としての経験を相当積んだ人の中から、裁判官になる人を選ぶことにしている国もあるのですが、日本では、司法試験に合格して、司法修習を終わるとすぐに、判事補に任官し、各地の裁判所に配属されます。ちなみに、裁判官になってから最初の10年間は「判事補」です。「判事」と呼ばれるまでには、法律家として10年間以上の経験が必要です。

判事補は、最初に配属された裁判所では新任判事補、略して、新補(しんぼ)と呼ばれ、日々、裁判官として事件を担当することによって経験を積むほか、新補向けの研修を受けたりして、研鑽を積みます。任官3年目に、埼玉県和光市に

ある司法研修所での研修がありました。全国から同期の判事補が集まって、経験豊富な先輩裁判官を講師役に議論をしたり、各地の実情について情報交換をしたり、あるいは親睦を深めたり、実務を通じてみんな成長したんだなぁと感じた次第です。

そのほか、裁判所以外の場所で、1年から2年程度、裁判官以外の仕事等の経験を積む、「外部経験」と呼ばれる研鑽もあります。これは、最高裁判所の方針として、判事補が、裁判官としての身分を離れて、他の法律専門職の職務経験等を積むことによって、多様な知識・経験を備えた視野の広い判事を確保することを目的として、制度化されたものです。

「外部経験」には、弁護士として法律事務所で2年程度働くもの、民間企業で1年程度研鑽を積むもの、行政官庁や在外公館などに出向するもの、海外留学するものなどがあります。

私の同期でも、裁判所以外の様々な組織で外部経験をしている判事補がいます。1年や2年の経験では短いと思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、彼らと話をすると、裁判官としての立場を離れて一社会人として仕事をするすることで、異なる視点から事件や社会を見て、短い期間であっても貴重な経験をして確実に成長しているように感じます。

### 3 海外留学

私は、横浜地方裁判所で裁判官としての経験を3年積んだあと、ドイツ・ミュンヘンの知的財産法センター（Munich Intellectual Property Law Center）という知的財産法を専門的に学ぶロースクールに留学させていただき、1年間、研鑽を積みました。

海外留学を希望する判事補は、最高裁判所の募集に応じて願書を提出し、選考を経て、留学することができます。毎年、判事補が、アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア、ドイツ、フランス、ベルギーにおいて、裁判所やロースク

ールで勉強しています。自然科学分野の学問とは異なり，法律は，歴史や習慣などに大きく影響を受ける分野ですから，同じような法律でも国・地域によって差異があり，海外の法制度を学ぶことは本当に勉強になります。なぜそのような違いがあるのかを考えることは，とても興味深いですし，もし日本の制度を変えた場合にどうなるのかを推測をする上でも，外国の司法制度の実情を学ぶことは，役に立ちます。

私の留学先のロースクールには，19か国・地域から31人，年齢は20代から40代まで，弁護士や弁理士，公務員，科学者など，様々なバックグラウンドを持つ学生がいました。老練の法律家のみが裁判官になる国から来たクラスメートからは，そんなに若いのに裁判官なの？と言われたり（外見ほどは若くないのですが・・・），ドイツ法の影響を受けている国々の間でもずいぶん違いがあることを知ったり，思いもよらない方向の議論が出てきて驚くとともに，ああ，あの国ではそう考えるのかと納得したり，国が違って法律家同士は分かりあえるものかわと思うこともあれば，法律家同士なのになぜこんなに意見が違うのかと思うときもあり，司法制度を見ても日々の生活を見ても日本人はまじめ過ぎるところがあるのだなあと思ったり，はたまた，夜7時30分開始予定のパーティなのに，欧米人は9時すぎにバラバラと来て，生活時間感覚の違いを感じたり，脳が刺激される多くのことを経験しました。

私が留学から帰国してすでに数ヶ月が経ちましたが，留学中のあらゆる経験が，日本において裁判官として仕事をするとき，知識面においても，意識面においても，役に立っているように感じます。